

幼稚園で

サラー・ロー・ハモンド他

幼稚園の一日を「よい日」とするのは何であろうか。ある日の子どもたちの経験についてのいろいろなことがらが思いかぶ。

なるほど幼稚園の子どもは、園の生活を満足するための全ての理由を、多くのことばで発表することは、めったにない。「よい日」というのは、一つだけの大きなすばらしいものもあれば、または多くの小さな幸福感が集まってなる場合もあるかもしれない。

ピーターは母と車に乗っていた。彼は二十五人の一ばん最後になつた。教師は「さようなら」と手をふっていた。車は出発した。と、ギーと止まった。お母さんが呼び返す。「私も幼稚園にいきたいわ」といつて。それから教師はフィルがその日彼女をみつめて「ぼくは明日まで待ちきれないですよ」といつていたのを思い出した。そして非常な満足と喜びに満たされた。彼女は部屋にどつた。子どもの熱心な期待のことばが耳もとで鳴りひびいた。母親のことばが彼女の胸にひびき、また「よい日」にしたという、フィルの明日のためのよりよい計画の立案が始まつた。

しかし、なぜそれが、「よい日」になつたのか。何の魅惑が、ジーンが、幼稚園のおうち」と呼ぶように、彼らの心をとらえたのであろうか。幼稚園の「よい日」というものについての、子どもたちの感じのなかには、有形無形の多くのいろいろなものがある。いつている。

人形コーナーがあつた。そこには、カシーが着飾つた、ちぢれ毛で、つくろつた人形があつた。かの女は一日に何回も着物をきせたり、ぬがせたりした。レコードブレイヤーは今もまだあつた。しかし教師は、その両側にすわつて話に聞き入つてゐる、エレンとハロルドのことを考へた。パットはリズムのリーダーだつた。女の子たちがまるく輪になつた。腰をかがめたり、手をうつたり、「わたしたちは他の子どものためにダンスをしてもいい？」と、息をはずませながら尋ねた。

よい日とするには、適当な場所と材料が必要だし、それが子どもたちに、創造的にこれらの考へを発表することができるようにさせる。

教師は、子どもが魅力的にならべた図書机をながめる。本が園児の心をとらえる。本棚には、あふれるように本があったが、父や母に何とも読んでもらうために家にもち帰って、今は一冊もないうように思えるほどである。多くの子がその日はお話の時間によまれたのと同じ本をほしがった。本を読んでしまった時「もう一度よんで」というのを聞くのくらい、うれしいことはない。今日は本への興味や読書欲が養われたのである。

つみき、トラック、汽車、粘土、パズル、クレヨンや絵の具がそれぞれの置場においてある。部屋は数分のうちに蜂の巣をつついたようになる。消防夫、おまわりさん、医者、看護婦、パイロット、技師、食料商、大工——最初何かになり、それから他のものに。しかし、それは五歳児には真剣な生活である。ひきだしが開けられる。スカート、襟まき、手帳、ハイヒールの靴をひっぱり出して、もつと本物にみえるように衣裳をつける。

今日はネリーの誕生日である。彼女はケーキ作りの手伝いに、ジョニーとスーをえらんだ。卵をわり、ねり粉をたたくのは、何とおもしろいことだろう。子どもたちが「ハッピー、パーズデー」を歌ったとき、ネリーはほんとううれしそうに見えた。彼女にあって最良の日であった。

温かい友好的なふんいきにつつまれたこの日は、子どもたちに自分たちは安全で、価値が認められ、必要とされていることを感

じさせた。彼らはケーキを作りながら多くの学習をした。つまり、コップ半分、卵二個、四分の一ポンド、などの算数の語彙を学んだ。

さて教師は地球儀をちらっとみた。そしてこの年ごろの子どもの飽くことを知らない好奇心を考えた。彼らは学びたがっている。彼らは知識を求めている。彼らは身のまわりのことだけでなく、遠くのことについても、あらゆることについてすべてを知りたがっている。そして次から次に質問する。

五歳児は小さいかもしれない。しかし彼らは大きなことを考えており、大きなことを話すのを好む。ある日ケリーは、部屋に入ると、掲示板を見ていった。「そうだ、ぼくたちいい研究を思いついたよ、ロケットと宇宙の研究をしよう。きつとおもしろいぞ。今年の終りまでそれを研究しよう」と。

彼らは世界について、たくさんのおもしろいことを学んだ。そして探険したり実験したりしたとき、彼らは本当によろこんだ。彼らは自分のことを「科学者」とよんだ。毎日かれらのロッカーには、分けあう品物がいっぱいはいっていた。あたかも純金であるかのように宝物をしっかりと抱きしめて誇らしげに歩きまわった。

この話は、グループで語られたことを書きとつたものであるが、彼らの学習のまようを表わしている。

「小鳥——私たちはビューティとサムという二羽のいんこをも

っている。それはどちらも青緑色である。ピューティが六個の卵を産んだ。——彼女は最初の卵をこわした。二、三日してもうひとつの卵を産んだ。それからさらに四個を産んだ。四個の卵はかえった。最後の卵はかえらなかつた。最後の卵は紙のように軽かつた。

ここに、卵についてのおもしろいことがわかつた。彼らは午後産んで、朝かえず。卵がかえるには十八日間かかるのだ」

幼稚園のよい日には、知的な刺激が与えられる。問題を尋ねたり、答を発見したりする機会、新しい言葉を学び、それを使う機会、それは多くの領域についての勉強の手初めである。子どもたちは——仕事に集中し、じょうずに材料を使うように注意するなど——よい仕事の習慣を学ぶ。

いく日かの忘れられない日があつた。自分たちが学校で朝食を料理した日、それから愛玩動物のショーをし、他の子どもをそれに招待した日など。あの日はキムとライズにとつて一ばん楽しかつた日で、「早く早くバターになれ」と一緒に歌いながらかきまぜたものだった。

一ばんはしゃいだのは、道化師が出てきて、彼の顔にメーキャップをしたときだ。全部の子どもが笑つた。そして道化師が普通の人であることを知つたのは大収穫であつた。

子どもたちは皆、酪農場に大きなバスに乗つて行つた日のこと

をおぼえているだろう。春のある時、牧羊場に連れられて、羊がやがてくる暑い夏を快く過ごすために、毛をつまっていたのを見た。人間的、自然的環境の中のほんものの経験が大切である。

しかし、他の日は正規の日々である。子どもたちは、毎日の日課——手を洗つたり、便所にいったり、ひるねをしたり、遊んだり、しごとをしたりして共に生活すること——に忙しい。毎日そこには問題がある。しかしこういう問題を解決しながら、子どもたちはよりよく生きるための幸福感を得ていくようだ。

恐ろしがりで、はにかみ屋であつたアリスは、もう今では自身と自分の能力を発見して、得意で胸をはるようになった。ボスで強情ものであつたエドワードは、今ではすっかり変わつて、他のものを傷つけずに遊べるようになった。子どもたちは、話を聞くことや、指図に従うことや、じょうずに選ぶことや、自分で自分の仕事をすることを学んだ。これらは「よい日」であつた。というのは子どもたちがその計画に参与したから。そして自由と責任との関係を体験したのだから。

教師は時計をみた。顔にはほえみが浮かんでいる。この小さな活動的な生きものつまり、子どもたちは、彼女の心をとらえているし、彼女にはそれがわかつている。教師は計画し、研究し、仕事をせねばならぬ。またすぐやってくるフィルの明日のために。

(西南女学院短期大学・市丸成人訳)